

# 被災者の奮う生命、共感、支援、自立

—足湯ボランティア「つぶやき」の分析から—

東京大学名誉教授 東京大学被災地支援ネットワーク（代表幹事）

似田貝 香門



## 1. 実践としての「つぶやき」の分析をめざして

### (1) 「つぶやき」の分類

2011年夏、「東京大学被災地支援ネットワーク」(以下、ネットとする)は、思いがけず、震災がつながる全国ネットワーク・日本財団ROADがボランティアを募り、被災地で延べ2,000の足湯ボランティアが書き取った被災者の「つぶやき」(現在16,000ケース)の、分析を依頼された<sup>(1)</sup>。

「つぶやき」とは、被災地の支援の中で被災者が足湯ボランティアの身体的サービスを受けながら、ごく自然にこぼす発話の言葉群である。

社会学にはヒアリングという手法がある。それは、調査者と被調査者との対話(双方向的コミュニケーション)を概ね前提としている。また、「つぶやき」が採取された場所は、足湯活動現場に限られ、たまたま足湯にくる被災者(概ね高齢者で女性が多い)であり、社会調査の原則である構造化された調査票によるものでもなければ、かつボランティアが聴き取り書き取った文章も、記入者の個性が入り込んでいる。統計的サンプリングがなされた標本でもない。したがって、「つぶやき」が被災地の典型的声であるとは、なかなか言いがたい。こうした非設計的なデータは、私たちの専門領域の社会調査データと異なる。私たちは、取り扱いに戸惑いを感じた。

このような戸惑いを強く感じつつ、ともかく、数多い「つぶやき」をネットのメンバーの先生方がPCに入力作業を始めた。被災者の「つぶやき」を資料として記録し、これを分析するという事は、恐らくこれまでなかったケースであり、私たちは、何とかして分析方法を考えようと思った。

少しずつ作業を始めたが、この途上で、「つぶやき

を聞いた以上は、応えられる部分はすぐに応答する必要がある」(似田貝; 東大ROADつぶやき分析に関するミーティング・議事メモ 2011/09/27) という基本方針だけ確認した。

「つぶやき」のなかで語られる「ことば」(名詞)の登場する回数の頻度の多いのは、まとめると、避難所・仮設住宅生活、家族・知人足湯、避難・仮設、被災、社会生活・地域社会について多く語られている。

表1. 「つぶやき」内容の分類

1 震災・原発・被災体験	14 仮設をめぐる生活環境
2 生死	15 まちづくり・復興計画
3 放射能	16 将来設計
4 医療・健康・介護・福祉	17 娯楽・趣味
5 家族・親族	18 することがない
6 近隣・友人	19 教育・子育て・学校
7 動物・ペット	20 土地柄(地域自慢)
8 仕事・生業	21 個人史・生きがい
9 金銭・生活費	22 世間話
10 土地・財産・家屋	23 足湯
11 買い物	24 ボランティア・支援
12 交通・移動	25 避難所をめぐる生活環境
13 衣食・生活物資	

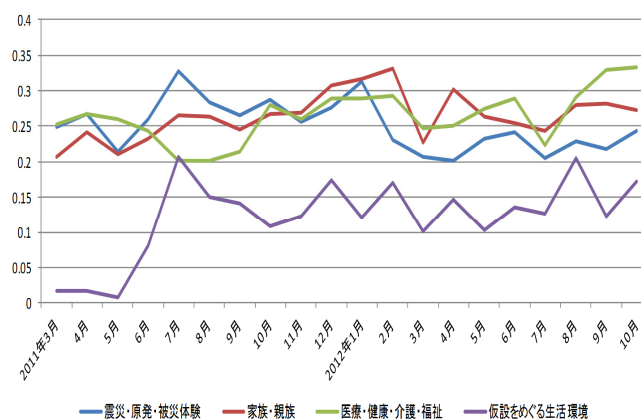


図1. 「つぶやき」年次変化

分析するには、「つぶやき」の内容がどのようなも

ので、またどの内容が多いのか等々についてまず明らかにしなければ前に進むことができない。そこで作成されたのが「つぶやき」の内容の分類（表1，図1）である。

## （2）分析結果は活動現場へ

「つぶやき」25分類の第1次分析結果として、概略以下のような事にわれわれは注目した。

①確実な苦しみ、孤独、寂しさ、悲しみについて「語る」内容は、時間的経過と変化することなく持続されている（図1参照）。災害（地震津波）による、家屋、財産、生産現場の流失、多くの肉親や親しい方々を失ったという、とてつもなく大きな喪失感が、被災者の苦しみや精神的ダメージを与え、癒やされることなく被災生活を送っている、という事実が、私たちに強烈に印象づけられた。

ついで、予想外に多かったのは、②足湯サービスや足湯ボランティアへの感謝、謝辞の「ことば」の現出頻度の圧倒的高さ、という点だった。

その結果、③悲しみ（pathos）や、生きようとする決意の気分や感情・悲嘆の反応（怒り、事実の否認、後悔や自責の念）、時にはこれらは不眠や食欲不振という体調不調を伴う、落ち込み、自責の念、罪責感、怒り、落胆、他者への羨望など、それらが絶え心の中で大きく揺れ動いている、というところの葛藤に苦しんでいると十分に推し量ることができよう。

①からは、苦しみ、心の健康を害している被災者が確実に、堅固に存在していることが判明できる。このような、未だに苦しみからの解放や癒しが不在のままの多くの被災者が確実に存在している、という事実こそ私たちは注視し、分析のフォーカスを据えるべきと判断した。つまり「つぶやき」分析の最初の主要課題は、被災者の苦しみ、悲しみへの対応としてケア活動が現場で充実されるべき、と判断したわけである。ちなみにケアの専門家は、阪神・淡路大震災で多くのPTSDと診断された被災者に対し、7割が自力で回復していける、と論じている（加藤寛〔兵庫県こころのケアセンター〕「心のケア 阪神・淡路大震災から東

北へ」）。

自力といっても、さまざまなきっかけがあったはずである。そのなかには周囲の多くの働きかけがあったと思われる（中井久夫編『1995年1月・神戸「阪神大震災」下の精神科医たち』）。早くそのような被災者を見つけ、専門家につなぐことができるなら、専門家の治療によって回復を早める事が出来る。またそのように診断される前に、外部の支援者や周囲の人々が、被災者の心を開き、悩みを少しでも解決できるような、生活環境の安定に心がけるなら、回復も早く、またPTSDにならずにすむかもしれない。

そこから私たちは、足湯が提供される場面で、心の負担を感じている被災者を発見し、できるだけ早く、専門家につなげ、早期に手当ができるように現場で工夫できないかどうか、ということが実践的テーマとして大切なことと思う様になった。こうして、足湯活動現場に、分析結果を実践テーマとして提示し、ケアの仕組みづくりとその条件整備が緊要な実践課題ということになった。この結果を、震災がつなぐ全国ネットワーク「仮設支援連絡会」に報告すると共に、早速、足湯ボランティア活動現場の宮城県七ヶ浜〔「レスキューストックヤード」〕、岩手県陸前高田市モビリア仮設住宅団地〔「陸前たがだ八起プロジェクト」〕へ、ケアの仕組みの実態調査を行った。

同時に、ケアの専門家から学ぶと伴に、足湯ボランティア活動への協働の可能性を相談することにした②。この相談の結果、後にふれるように、「つぶやき」から、足湯ボランティア現場で、ケアの対象者を見つけ、ケア可能な専門家につなぐことを可能にする素材として、心の健康に関する「ガイドブック」（仮称）を作ることを決意するに至った③。

## （3）足湯ボランティアの役割（第1次的癒やし・ケア）

「つぶやき」の第1次分析の①と②の結果、私たちは「つぶやき」という独自の発話の形式に深い関心を持つに至った。その入り口として、「つぶやき」25分類の分析結果で概括した②足湯サービスや足湯ボラ

ンティアへの感謝、謝辞の「ことば」の現出頻度の圧倒的高さ、についてさらに分析してみよう。

②の足湯ボランティアへの感謝は、①の苦しみや、悲しみを、足湯ボランティアという全くの他者に発話していることと、深い関係がある。

足湯といういわば東洋医学的（整体、気功、足湯など）な身体的サービスを受けていると、自然に心が解けてきて、他者に「つぶやく」という発話行為が可能となり、その結果、①のような苦しみ、悲しみ、悲哀を内容とする「つぶやき」が語られる、と一般的に解せられるであろう。足湯ボランティア活動は、その時、事実上の傾聴ボランティアの役割を果たし、結果として、被災者の心が癒やされる、という予期せぬ効果を生み出していると推察することができる。

つまり、足湯ボランティア活動と被災者の中で生起する「つぶやき」という発話行為は、二者関係の特異な空間を事実上つくり上げられていることを意味する。故に、このボランティア活動とそれに惹起されて生み出される被災者の発話行為が生み出されたと言うことは、事実上、この二者関係によって、被災者への癒やし、ケア（第1次的いやし・ケア）の役割を果たしている、という可能性が極めて高い、と思われる。

「つぶやき」の分析は、こうして、被災者の苦しみ、悲しみ、悲哀が、なお深く被災者に解き放たれず、留まっているという事実の確認ばかりか、足湯とボランティアによる身体的サービスを受け取ることによって、「つぶやき」という発話が可能な対話空間が生み出され、それが事実上の、第一次的な癒し・ケアを生み出している、ということであろう。こうして、「つぶやき」というデータの特異性が、かえって、私たちは上記のような分析結果に大きな関心を生み出すことになった。

このような特異なデータの読み方、関心、基本視点は、私たちが1995年の阪神・淡路大震災の際に調査し、そこで関心を引きつけられた、これまでとは異なる、新しい活動・運動の実践が生み出されつつある支

援者の活動とその実践思想の影響に学ぶところが多かったと思う。それは、「たった一人を大切に」、「最後の一人まで視線を向ける」（村井雅清）、「最後の一人まで見捨てない」、「最後まで生きること・自立」（黒田裕子）という、被災者各自の生命＝生活の「他ならなさ（uniqueness）」（アーレント）という視点に「こだわる」（村井雅清）、自立支援の新たな実践思想と呼ばれるべきものである。私たちは、このような支援の基本線を、〈生の固有性〉へこだわる実践思想と呼ぶことにしてきた（似田貝編,2008）。

「つぶやき」という特異なデータを分析する（データを読む）基本視点を、「つぶやき」に一人ひとりの被災者の〈声〉を、文章化されたテキストから読みとるべきだ、と考えたからである。

こうして、私たちは「つぶやき」の分析方針を、足湯ボランティア現場（field）へ実践として使用可能な提言、問題提起をするように心がけるようにした。つまり、「つぶやき」という特異な資料（データ）をどのように学問的かつ実践的に使用できるか、また被災者自立に関する生活支援のテーマとそれを解決する諸主体への働きかけの方法を探索するとともに、足湯ボランティアと被災者に関わる専門家（職能者）との協働関係の模索等を考えようとすることにした。

## 2. 「つぶやき」とは何か

### （1）他者との出会いの場、歓待（hospitalité）の場を生み出す実践空間

少し学問的なテーマに引きつけると、足湯ボランティア活動とそれに惹起され「つぶやき」が発せられる空間は、次のような実践空間と思われる。

被災者にとって、足湯活動の場は、被災者が他者の足湯サービスを身体として受け入れる場である。すなわちボランティアが、足湯を希望した被災者の足を湯につけ、そして手の指を一本一本もむ。そして手のひら全体をもみほぐす。前腕、上腕をもみほぐす。

このように被災者が、自らの身体を他者に〈触れさせる〉ことによって生ずるであろう、身体感覚の開放

感、安心感は、心に深く閉ざされていたのであろう苦しみを、他者に言葉となって打ち明けるといふ、発話行為「つぶやき」を生み出していると思われる。それを足湯ボランティアが、〈聴く〉という応答を行うことによって、両者に〈「語る」－「聴く」〉という心のコミュニケーションが形成される。その瞬間に被災者は、単なる多くの匿名の被災者として扱われているのではなく、各自固有の名前を持ち、これまで生きてきた個人として、かつ今回の災害に遭ってしまい、苦しみを背負ってしまったそのような〈生の固有性〉をもつ、一人の人としての被災者であることを、他者たる足湯ボランティアに「受け入れられている」、と実感するのだろう。

このような意味で、足湯の場は、被災者にとってボランティアという他者との出会いの場となる。同時に、ボランティアにとっても、一人の苦しみを背負った人（他者）との出会いの場となる。

足湯ボランティアが、被災者の「つぶやき」を〈聴く〉という応答関係が生成されてはじめて、ボランティアと被災者は一般的な、相互匿名的な関わりでなく、お互いに〈生の固有性〉をもつ、一人の人間として関係が生成されようとしている、そのような場が足湯の場であるのであろう。

## （２）身体の「触れ合い」

身体感覚の心の動きである、開放感、安心感とは何であろうか。足湯活動を受ける被災者にとって、どのような心の変化が起こるのであろうか。もう少し詳しく言及しよう。

先に触れたように、足湯の現場に来る被災者は、他者であるボランティアに、自らの身体に触れあわせる足湯という活動を受け入れている。他者の身体的サービスを受け入れるというふるまいは、他者との関わりという関係性（対他関係）の、「受け入れ可能性（acceptation）」（J.Derrida 1997=2004）を潜在的に有している。

こうした他者のサービスを受け入れている被災者にとって、他者による身体「触れ合い」は、少な

らず自らの身体を、ありのままの人間（「人間的自然」）として解放する効果を生み出すのだろう。

足湯での「手の指を一本一本もむ。そして手のひら全体をもみほぐす。前腕、上腕をもみほぐす」という、身体的「触れ合い」は、発達心理学のハーローの実験や、動物行動学のローレンツの「共感の整体学」を引き合いに出すまでもなく、生命活動を呼び覚ます基礎である。

誰にも語れず、深くこころに閉じ込めてしまった自己が、この他者による身体的「触れ合い」によって、哀しみや苦しみ（pathos）を受けたという、ありのままの状態を事実として受けとめるという、身体の中かの微妙な変化が生まれるのであろう。こうした、こころの変化に敏感に反応する形の一つが、現に在る自己の存在状況を、自己にそして傍らにいる他者に、ことばとして発話（parole）する行為が「つぶやき」なのであろう。それは少なからず、対自関係としての精神の動きであるとともに、対他関係のふるまいといえる。

それは自らの身体の差異を感じ取り、まずは自己に発話（parole）するというこころの自律性を生じさせる前兆ではないか。このように考えると、哀しみや苦しみ（pathos）のなかにある被災者の自立・再生の前提は、なにより、被災者が身体的な感性を取り戻し、そのことによって人としての自律力を生み出すことではなかろうか。

足湯という身体的「触れ合い」は、こうして被災者自身の「身体の声を聴く」（Antonio Negri）<sup>4</sup> 動きに作用し、「つぶやき」という独自の発話（parole）形式を生み出す。

被災者自身のこうした〈自己への語りかけ〉（「つぶやき」）を、近傍に寄り添っているボランティアが、それを聴くことに傾注（tention）している。つまり、「つぶやき」は、被災者自己内部の対話で有り、その傍ら被災者に身体に「触れ」、ボランティア（他者）との対話をも生み出している。こうした出来事は、いわば、自己対象化と主体化の相互のうながしあい、誘

い合いの過程ともいえる。

すなわち、足湯活動(他者による身体の「触れ合い」)  
→被災者の奮う生命「内部生命」・生命活動の賦活→  
少なからず自己変化を呼び起こす、という一連の相互  
行為の現れが実現されうる。

このように、足湯での「つぶやき」という事象は、  
理論的・理性的の把握として扱われるのではなく、感性  
(身体)間の対話が基礎的であるということを私たちに  
教えている。人間にとっての本当の「力」とは、感  
覚が豊かであること、体のなかの微妙な差異を感じと  
ることができること、そして自己をしっかりと捉えると  
いう動きの微調整を行えることが、自己再生の一つの  
原型と考えられるであろう。

### 3. 身体への「声を聴く」

#### —感性の回復から「共感」へ

##### (1)「共感」という方法

このような感性を基にして方法的に高められてき  
たのが「共感」という方法である。

「共感」とは、自己の内部感覚としての「触」の感  
覚へまで立ち返って、対象との関係を直接に捉まえる  
認識の方法である。「共感」を深める、広げるとは、  
自己の内部的な「人間的自然」を解き放ち、自己の根  
源を直接に実感する営みのことである。それは、出来  
事や他者との出会いによる、自己内部感覚での自己の  
差異に敏感に反応することによって生ずる、こころの  
「ゆらぎ」、不安定さ、からの解放の行為である。

したがって「共感」が成り立つのは、なによりまず  
はこのような自己への関心である。こうした対自関係  
を、かつて花崎皋平(1981)は、「共感と自己への関  
心とは表裏一体のものである」(p.54)、と指摘した理  
由もこのような行為を指しているからであろう。

自己への関心とは、別言すれば、他者からの関心(共  
感)を得たい、ということである。自己と異なる他者  
が、己の現に置かれている状態を認識し、自己の状態  
への関心という同一化への精神的作用を期待するこ  
とである。このような対象の差異の同一化という関係

性を促す場が、「つぶやき」を聴き、受けとめている  
ボランティアが傍らに寄り添っている足湯活動空間  
である。足湯という特異な空間は、被災者にとっての  
自己関係と他者関係が同時相即的に形成する場であ  
る。

このような傍らの他者を被災者が見いだしたとき、  
自分は他者から無視されていない、無関心にされてい  
ない、見棄てられていない、と感ずる。それが、第1  
次的なケアである所以であろう。何よりも傍らにいる  
ボランティアの活動によって、被災者がヒトとしての  
自律が回復するのである。自律性を引き出す力、それ  
がケアである。

ヒトとしての回復、主体再生の瞬時とは、このよう  
なこころの「ゆらぎ」、不安定性からの次なる自己の  
有りように向かったの、バランスの調整、が必要とさ  
れる時ではないか。「つぶやき」が発せられるのはま  
さにこのような瞬時である。それは、こころの「ゆら  
ぎ」不安定性からの「解放」と、ヒトとしての次の「動  
き」を結びつける可能性をもっている。その動きこそ、  
こころの自律から、社会に向かったの自立へ、である。  
足湯活動が第1次的なケア行為となりうるのは、こ  
うした自立への前兆として、こころの自律が曲がりな  
りにも再生しつつあるときでなかろうか。

野口体操で有名な野口三千三(1996)、「身体と言  
葉」の関係を探りながら、ことばの本質は独り言(内  
言)であるという。身体の変化により、そのことを表  
す「初源情報」が、「ことば」だという。叫び声、泣  
き声、呻き、笑いなどの擬音語、擬態語がその典型だ  
という。「つぶやき」の単語の頻度分析でも、事実、  
「うー」、「あー」、「ああ」、「あっ」という擬態語が極  
めて多い。

「つぶやき」はこうした「身体の声」を自己内への  
叫び(叫び声、泣き声、呻き、笑い等の擬音語)、唸  
りという擬態語や、自己ないし他者に発することば、と  
なって放たれる。こうした「身体の声」を自己内への  
叫び「つぶやき」は、ボランティアの身体的「触れ合  
い」によって触発された被災者の身体に現に起きつつ

ある、自己への関心（「共感」）を、もう少し、一体的に自己を対象化し、自分自身と他者に自己説得的に語られることば、といえよう。

足湯ボランティアにとっては、能動的な活動としての足湯活動の結果、思いがけず被災者の「つぶやき」聴く（傾聴）、という受動的な立場に置かれる。被災者と自己との〈隔たり〉の大きさを知るに至り、自己が自明と思っていた現存在の平穏性を認識する（自己への関心）。あらためて苦しみ（pathos）の中にある被災者との差異を認識する（他者への関心）。そこから、被災者のおかれている状況への「同一化」という最初の情動が生まれる。それはいわば、自他未分の精神状態の精神作用といえる。

こうして、ボランティアは、「つぶやき」からは発する被災者の「身体の声」を読み取り、了解しようとする。その方法が「共感」（他者への共感能力）という方法である。この方法は、被災者の「つぶやき」や身振りからの作用から、その当事者たる他者へ関心を高めていく。それは同時に共感能力の取得であり、それを瞬時に駆使して、「身体の声」を聴き届けようとする方法である。したがって、ケアとはこのように、相互的行為が生まれたとき、有効にその作法が作用するといえよう。

こうして、こころの通う相互行為は、身体的「触れ合い」と「つぶやき」を通して、ヒトが次をめざして立ち上がる前兆としての、自律の根源を相互に呼び出す。

足湯ボランティア活動は、被災者の身体を「触る」という行為を介して、被災者への〈癒やし〉の活動と考えられる。それは、被災者にとっては、生命の活動を呼び覚まされる引き金（trigger）である。被災者の奮う生命、生命活動の賦活を呼び起こす、それは生活意思を回復し、持続しようとする意思を復権させることに繋がる。

不幸、受難、苦しみ（pathos）のどん底にあるとき、ヒトとヒトとがじかに身体的に「触れ合う」とき、ヒトとしての生命活動（の回復）を伴う、本源的な意

思疎通（交信）となり得る、「つぶやき」（ことば）が、生み出される、といえるだろう。

## （２）「共感」から社会の分析と社会の仕組みづくりへ

被災者の対自関係（自己への関心、人に関心を持ってもらいたいという「共感」）、さらに自分と異なる對他者への関心（他者へ関心という「共感」）と、ボランティアの他者への関心（共感能力）の２つの関心が交信（コミュニケーション）されるとき、「自立とは支え合い」という、共感に基礎づけられた同意の思想の共鳴盤が形作られる可能性が高まる。

次をめざす行為対象が、ボランティアと被災者とが、ヒトとしての自立、地域としての自立という目標に、このような双方向的な「共感」に基礎づけられ、同意したとき、ヒトとしてもつ共通のビジョン、価値理念、プログラムの共鳴盤が生み出される。それが復興思想と呼ばれるべきものである。

しかしその途は単純ではない。２つばかり指摘しておこう。

第１に、「共感」という内面的、精神的世界のみで、被災者の自立を妨げている現実世界を変えることはできない。価値理念を、社会の仕組みとして、現状分析とその可能性を条件分析によるプログラムを構想実践するのが、社会科学である。価値理念や倫理的人間で社会は構成されていない現実から出発しなければならないからである。

すなわち現実世界は、人間を「共感」のみを前提にして成り立っていない。自己への関心（対自的關係）と他者への関心（対他的關係）のダイナミズムとしての「共感」という内的・精神的世界を梃子として、それを現実世界のあり方が何故、人々の自立を可能とする社会になっていないのか、どうしたらその可能性を手に入れることができるのか、という社会機構、制度のあり方への「分析」という別様の方法を考えねばならない。

第２に、ボランティアの「共感」能力がどのように高くとも、あらゆる対象に普遍的に適用可能とするの

は、誤りである。〈個の有限性〉、ひとの弱さ（可傷性 *vulnérabilité*）、それが故にひとは「弱い存在」であることも、リアルに認識できなければならない<sup>5)</sup>。

#### 補注

(1)足湯隊（2011年度～2013年度）が書き取った16,000のケースである。依頼された東京大学被災地支援ネットワークは、PCへの入力作業を支援し、分析を行った（参加は、震災がつなぐ全国ネットワーク事務局、清水亮〔社会学〕、三井さよ〔社会学〕、似田貝〔社会学〕、川上憲人〔医学部研究室〕）。

報告書は、日本財団 RORD+震災がつなぐ全国ネットワーク編（2013）。「東京大学被災地支援ネットワーク」の被災地支援活動については、以下を参照。

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~utshien/Project.html>

- (2)「つぶやき研究会」をつくり、宮本智子（臨床心理士）2012年9月6日 日本財団、吉椿雅道（被災地 NGO 協働センター）2012年10月12日 日本財団、川上憲人（東京大学医学研究科精神保健学分野・教授）、関谷裕希（同・特任研究員/臨床心理士）（2012年11月29日）の報告を受けた。
- (3)「つぶやき」分析から、こころの問題に関する「ガイドブック」（仮称）の作成方法及びその作業の一端に関しては、似田貝香門（2013）参照。
- (4)「身体の声聴く」という表現は、ネグリの「哀しみの定式化」での説明のものを借用。Antonio Negri（2002=2004）、似田貝香門（2008）参照。
- (5) 私は「弱い存在」論を論ずるにあたり、既存の主体論における能動主体への過剰な参照を批判的に受けとめ、受動主体の意味の再認と参照の意義を強調している。「人間の弱さを前提にし、受動・受苦の意味を積極的に認めようとする〈パトスの知〉である」（中村雄二郎,1999）という考え方を継受し、近代の主体の立ち上がりの参照体系 *reference* たる、社会と向き合うマクロ性、積極性、能動性、確実性という能動への関心から、身体的ミクロ性〔ミクロロジー〕、受動性、忍耐性、不確実性〔未決定性〕と決断という受動への、主体の参照体系の重点移動、ないし強調を強調したい。本書で使用する、〈主体〉とは、西洋近代が設定してき

た言説的な主体である「人間」ではなく、現実にも多様に、〈生の固有性〉を追求しながら生き、行為する場面に立ち現れる主体を問題としている（似田貝香門 2008）

#### 参考文献

- 1)内田義彦,1967,『日本思想史におけるウエーバー的問題』のなかの Rousseau と Smith」（『日本資本主義の思想像』, 岩波書店）
- 2)中村雄二郎,1999,『死と生のレッスン』（青土社）
- 3)野口三千三,1996,『原初生命体としての人間 — 野口体操の理論』（岩波現代文庫）
- 4)似田貝香門,2008,「市民の複数性—現代の〈生〉をめぐる〈主体性〉と〈公共性〉」（似田貝香門編『自立支援の実践知—阪神・淡路大震災と共同・市民社会』（東信堂）
- 5)似田貝香門,2009,「コミュニティ・ワークと〈実践知〉」（コミュニティ・自治・歴史研究会『ヘスティアとクリオ』No.08号,2009年8月,pp.5~17）
- 6)似田貝香門,2012,「ボランティアと市民社会—阪神・淡路大震災と東日本大震災からの問題提起」（『震災学』vol.1 東北学院大学; シンポジウム「東日本大震災と学生ボランティアの役割—大学間連携による取り組みとその課題」,pp.144~155）
- 7)似田貝香門,2013,「被災地支援の社会学 東日本大震災の支援のネットワーク」（山本泰・佐藤健二・佐藤俊樹編著（新世社）,p.300~314）
- 8)似田貝香門,2013,『つぶやき』分析のまとめと今後の課題」（日本財団 RORD+震災がつなぐ全国ネットワーク編『寄り添いからつながりを 震災がつなぐ全国ネットワーク 東日本大震災支援活動記録2』,pp.31~37）
- 9)花崎皋平,1981,『生きる場の哲学 — 共感からの出発—』（岩波新書）
- 10)Antonio Negri, Job, La Force de L' Esclave. traduit de l' italien par Judith Revel, Bayard, 2002. (邦訳『ヨブ』p.84)
- 11)Jacques Derrida, Adieu — a Emmanue levinas, Galilee, 1997 (1997=2004 邦訳 p.45)